

図鑑に載ってない虫

2007(平成19)年7月15日鑑賞<テアトル梅田>

★★★



監督・脚本＝三木聡／出演＝伊勢谷友介／松尾スズキ／菊地凜子／高橋恵子／岩松了／ふせえり／水野美紀／松重豊／笹野高史／三谷昇／片桐はいり（日活配給／2007年日本映画／103分）

……『ダメジン』（06年）の「脱力系」から、今回三木聡ワールドは「魔術系」の新境地へ……？ 「死にモドキを探し、死後の世界をルポせよ」との命を受けて、クソ暑い夏の中、「俺」の旅が始まった……。そこでは、奇妙に変身したアカデミー賞助演女優賞ノミネート女優を含めたケツタイな人間たちによる、デタラメな物語がタップリと……。しかしてその展開を見れば、発想の豊かさとはバカバカしさのレベルでは松本人志監督の『大日本人』より数段上と私はみたが、さてあなたのご意見は……？

脱力系から魔術系へ……

話題作でありながら私が見逃す映画があるのは、①試写の案内を頂く会社と頂いていない会社があること、②私が株主になっている会社となっていない会社があること、③場所的に自転車で行きやすい所と行きにくい所があること、という3つの理由によるもの。三木聡監督の『イン・ザ・プール』（05年）はオダギリジョーが、『亀は意外と速く泳ぐ』（05年）は上野樹里、蒼井優が出演している映画で新聞等でもよく目にしていたにもかかわらず、上記3つの理由で残念ながら見逃していたもの。

私をはじめて観た三木聡ワールドは『ダメジン』（06年）だった。これは三木聡監督の名前が売れ、「脱力系」という新語も定着する中で、彼のデビュー作が見直されたため、再製作されたものだが、何とも言えないその不思議さにとにかくビックリしたもの（『シネマルーム11』247頁参照）。ところが今回の『図鑑に載ってない虫』は、「元祖“脱力系”のパワフルな新境地！」として“魔術系”とも言える不思議な世界が出来あがった」とのこと。一体その魔術系とはどんなもの……？

テーマは「死にモドキ」……？

この映画のテーマは明確。それは、月刊『黒い本』の美人編集長（水野美紀）が、主人公である俺（伊勢谷友介）に下した「“死にモドキ”を使って、死後の世界をルポするように」との命令だ。しかも、そのルポが8月末の締切りに間に合わなければ美人編集長から半殺しにされるというからナマ半可ではない。出版会社は軍隊ではないから、いくら上司から部下に対する指示でも、「命令」とか殺されるというのは不穏当なことは明らか。ところがこの映画では、「締め切りを守らない奴は死ね！」と大書されたバカ広い部屋におけるそんなやりとりが、実にピッタリハマっているところからして、既に常識的な映画ではなく、魔術系映画……？

それはともかく、「死にモドキ」って一体ナニ……？ まずは、そこから調べていくのが、ルポライターのお仕事らしい。そこで、俺は、オルゴール職人のエンドー（松尾スズキ）と共に、同じく「死にモドキ」を探していたというカメラマンの真島（松重豊）のアパートへ向かうところからスタートした。この映画はそんな「死にモドキ」を探し、それを使って死後の世界をルポするというけったいなテーマを追い求めたもの。しかして、そんなけったいなテーマで描かれる魔術系映画のバカバカしさは……？

レッドカーペット女優の変身ぶりにビックリ！

新聞やキネマ旬報の写真で何回も観たのが、『バベル』（06年）で第79回アカデミー賞の最優秀助演女優賞候補にノミネートされたことによって、授賞式のレッドカーペット上をあでやかな黒のドレスを身にまとって歩いていた女優菊地凜子の姿。ところが、その女優がこの映画では……？

パンフレットにある三木聡監督のインタビューを読むと、2006年、友人から『バベル』に出ている面白いコがいるから会わないかと言われたのが彼女との出会いのきっかけらしいが、彼女が国際的に活躍しているということを三木聡監督は後で聞いたらしい。人間の出会いなんて、所詮そんなもの……？ したがって、菊地凜子も、変に国際派女優とかアカデミーノミネート女優と冠がつけられることによって逆にやりにくくなる面を注意しなければ……。もっとも、彼女は「菊地百合子」の名前で既にキャリアのある女優だったということだし、この映画で見せる不思議な雰囲気を見て

いると、硬軟どちらも、またシリアスでもコメディでも何でもこなせそうだから大丈夫……？

なかなかタイトルと結びつかないが……？

この映画がなぜ『図鑑に載ってない虫』というタイトルになっているのか？ それは、「死にモドキ」を探し求めるケッタイなストーリーが始まって全然わからないまま……。予告編を観た時は、赤いオープンカーに乗って山に虫でも採りに行くのかなと思ったりもしたが、映画が始まると全然そういうものではなかったことが明らかに……。さて、『図鑑に載ってない虫』というタイトルは一体なぜ……？

そんな疑問をもったまま、スクリーン上には不思議なキャラの人物が次々と登場してくる。俺とエンドーに続くのは、リストカットのマニアであるサヨコ（菊地凜子）、「目玉のおっちゃん」（岩松了）、そしてその弟分のチョロリ（ふせえり）。したがって、別の観点から言うところのこの映画は、この5人のケッタイな連中による「死にモドキ」探しのロードムービー……？

バカバカしさは『大日本人』よりこちらの方が数段上……？

この映画のパンフレット冒頭には、てんとう虫のようなイラストと並ぶ「監督・脚本三木聡」のサイン（？）で、いわばこの映画の「巻頭言」が載っている。その文中には、「あんまり、暑くて今まで考えた事もない事を考えちゃうぜ」「デタラメな物語はさらなるデタラメを産み……」「物語のダムは決壊して、思わせぶりと始末におえない謎の洪水が……」というフレーズがあるが、まさにこの映画はそういうデタラメぶりのオンパレード。

ところが、そこに死にモドキを求める旅と俺が見てきた死後の世界をそれなりに描いているところがミソ。だから、そのバカバカしさはあの「天才」松本人志の初監督作品『大日本人』（07年）と同じだが、その描き方のバラエティーの豊かさと客をあちこちに連れていく頭の回転の早さは、こちらの方が数段上……？

したがって、①等身大のゼリー藤尾やニコラス・ケイジの顔をしたシオカラ・ケイジなど、くだらないダジャレのオンパレード、②カップヌードルの肉を集めてつくったステーキやゲロのお好み焼きなど、趣味の悪い思いつきの数々、③サロンパス煙草や接着剤コンタクトなど健康ブームに逆行する数々のアイデア、などがいっぱいだが、

さまざまな小道具を駆使したそのバカバカしさにも納得。さらに「猿の手」をネタにした死後の世界の展開や「乞食の巢」にみる人間模様と深い人間観察(?)、そして日本から韓国に通じる「伝説の海底トンネル」というバカでかいナンセンスな発想など、『大日本人』に見るワンパターンの怪獣対決よりよほどユニークで発想が豊かだと感心。

しっかりここまで書くと反論もたくさん来るだろうが、それは覚悟のうえで……。

2007(平成19)年7月18日記

ミニコラム

載るか載らないか、それが問題！

今や電子辞書が大はやりで国語辞典を駆逐したかに見えるが、やはり岩波書店の『広辞苑』は必需品。08年1月に10年ぶりに改訂される第6版では、1万語が新語として追加され計24万語になったとのこと。頁数も第5版より158頁増加して3044頁に。新語収録の編集方針は、流行を追うのではなく「定着した言葉を載せる」ということだから、広辞苑に載るか載らないかは新語にとっては大問題！

10万語から選出された現代生活に必須の1万語には、①若者言葉(イケメン、うざい、逆ざれ)、②IT用語(着メロ、ワンセグ、ブログ)、③時事用語(敵対的買収、京都議定書)、④世相反映語(メタボリック症候群、癒し系)、⑤カタカナ語(クレマー、リベンジ、スイーツ)等々がある。また、ユビキタス、ヘッジファンド、ピオトープなどの情報・通信・金融・経済・

環境用語が激増し、追加された1万語のうち4割がカタカナ語とのこと。さらに平成の世が19年間も続く中、昭和を懐かしく思い出す新語として「真知子巻」や「おしん」が採用。また「従軍慰安婦」や「南京大虐殺」は削除されずそのまま収録されているから、今後さらなる激しい論争が必至。

他方、「クールビズ」「できちゃった婚」「イケてる」など、常用されている使用範囲が狭かったり一時的な流行とみられたりする言葉は見送られたとのこと。

「歌は世に連れ、世は歌に連れ」とよく言われるが、言葉はそれ以上に世に連れて大きく変化していくもの。そうすると、下手な小説を読むより、広辞苑の新語を片っ端から読んでいく方がよほど面白いかも……？

2007(平成19)年11月21日